



「たとえば3年生が修学旅行に行く際。下級生から小遣い銭を取り立てるといふ悪しき慣習が定着していました。要するに賤別という名のカツアゲです。行事があるたびに、この手の問題が起きてしまう。教員集団は必死に指導にあたりました。しかし、なかなか生徒たちと心を通じ合わせる事ができない。逆に指導が厳しすぎると反発を呼んだこともありました。集団授業ボイコットも、そんなゴタゴタの中で起きた事件だったんです。本当に苦しい時期でした」（渡部教頭）

ひとたび学校の評価が落ちると、ますます意欲、学力の高い子どもが集まらなくなる。長井工業高校はそんな負のスパイラルに陥っていく。このころ同校を中退する生徒の数は、全校定員550名程度のうち年間20名前後にのぼっていた。

ただし、こうした混迷は長井工業高校だけの問題ではなかった。この時期、日本全国の多くの工業高校が同じような困難を抱えていた。のちに述べる長井工業高校の再生ストーリーとも関係するので、当時の状況について、専門家の論をひきながら確認しておこう。

教育学者の風間効は、『戦後工業教育の展開』（あづま書房）で、高度経済成長期以降の工業高校教育の困難を「高学歴社会」「脱工業社会」の切り口から分析する。「高学歴社会では……大学進学者のほとんどいない工業高校はそれだけでそこで学ぶ工業教育の意義が見出されず……存在すら危機に立たされる」「高学歴志向とすぐ就職することへの回避から、工業高校への志願者は普通高校への希望がたたれ、さりとて就職も望まない目的意識・学力・適性の低い生徒が多かった」。

議論を筆者なりに展開すればこういうことだ。経済成長と高学歴志向が進むにつれ、高校は大学等さらに上位の教育機関に進むための単なるステップになった。これにともない、職業人養成に目的を特化した工業高校は、偏差値序列の最底辺に位置づけられるようになった。ものづくりに興味があったり、ものづくりで身を立てようとする中学生の進路だった工業高校が、「普通科などの受験に失敗した生徒の受け皿」としての機能しか持たなくなった。必然的に工業高校生の落ちこぼれ意識は強まり、それがさらに意欲を低下させる悪循環が生まれた。

一方、日本全体の産業構造の変化、産業としての工業の高度化（ハイテク化、情報化等）も急速に進んだ。これにより伝統的な工業高校のカリキュラム、すなわち工業が労働集約的な産業であった時代の基礎技能等の価値が低下した。かつては金の卵とみなされた工業高校卒業生の輝きが失われた。こうした現象が並行して起きた結果、どんな変化が生まれたか。ものづくりに興味、関心がある中学生も、工業高校に進むより、普通高校を経て大学に進学の方が有利と考えるようになった。仮に工業高校で技術や技能を身につけても、将来それだけを武器に一生のキャリアを切りひらいていくのは難しいからだ。

社会状況が大きく変化し、それまで工業高校が果たしていた役割が現実とズレた。入口（入学者集め）と出口（卒業生の進路選択）で社会とうまく接続しなくなったことが、そこで行われる教育の空洞化を招いた。高度経済成長期を終えて以降、多くの工業高校が低迷した本質的理由はここにあると筆者は考える。

長井工業高校に話を戻そう。渡部教頭は、同校が独自に抱えていた困難として、次の点もあげる。

地元とのミスマッチが拡大、そして

「当時は、地元長井市の生徒に加え、20キロほど離れた米沢市からも一定数の生徒が入学していました。米沢は都市の規模も大きく、伝統校を含め高校数も多い。そこに進学できずに片田舎の長井の工業高校まで流れてくる生徒たちは、どうしても落ちこぼれ意識を持ってつるむようになってしまいました。そして誰も自分を知る人がいないまちだという思いから、つい誘惑に負けて万引きなど非行に走ってしまう。もちろんいちがいに米沢の子が悪かったとは言えませんが、そんな傾向があったのは確かだと思います」

「そのころの本校には、機械科、電子科、化工科の3学科がありました。このうち機械科と電子科は中堅企業を中心に長井に就職口がかなりあった。ところが化工科は、学んだ知識を生かせる進路が地元にあまりなかったんです。そもそも化工科は、長井随一の大企業であるマルコン電子から採用があることを見込んで設立されました。しかし時代の流れとともに、同社の採用は減っていく。地元で就職しにくい化工科にはやる気のある生徒が集まらない。本校としては指導が難しい子どもを受け入れざるをえなくなる。このミスマッチからはじまる悪循環も、学校全体の雰囲気悪くしていた側面がありました」

そんな長井工業高校に最大の危機が訪れたのは、1994～1995年ごろのことだ。校舎の老朽化と県の公立高校クラス数削減方針があいまって、とうとう廃校が具体的に検討されるに至ったのだ。長井工業高校ならではの存在価値を示せない限り存続は難しいという、ギリギリの状況だった。廃校危機に際し、長井工業高校周辺にまず生まれたのは、県の予算を引き出し、老朽化した校舎を建て直して学校存続をはかろうという地域の盛り上がりだった。中心となったのは、OB会組織である長井工業高校体育文化後援会だ。会長である地元有力企業、吉田製作所社長の吉田功さんは、同校定時制（現在は廃止）の第1期生OB。氏は後々まで学校と地域を結ぶキーマンとして大きな役割を果たすことになる。学校「外」が中心になって行われたこの運動は、2002年の新校舎完成となって結実する。外部の運動に呼応するように、長井工業高校内部からも教育内容の改革、すなわち学科編成やカリキュラムを地域のニーズに適したものにつくりかえることが、存続のための最重要課題ではないかという議論が起きた。同校在職歴が長く、改革論議で中心メンバーの一人となった大貫哲二教諭は回想する。

「それ以前も教員は、個々の持ち場でこの学校を何とかしよう、生徒たちに力をつけさせようと頑張っていたんです。特色ある実践としては、1980年代初頭から続いているマイクロマウス（自走型ロボット）づくり、あるいは校内ミニソーラーカー大会の実施などがあります。これらはかつて、一部の熱心な生徒を中心に学習のモチベーションアップ、進路選択を後押しする力になっていました」

「もういちど、開き直って」4学科体制へ再編

「また1985-86年に文部省（当時）指定研究校に選ばれた際には、教員と生徒が一体になって自作教材づくりに挑戦し、生徒の意欲が大きく高まりました。さらに本校の伝統でもある“課題研究”という授業科目では、生徒の興味関心に沿い、担当教員が自由に裁量を発揮して、ものづくり教育を展開してきました。ただ、これらの実践がなかなか有機的につながらなかった。学校組織として、対外的にアピールできるような、長井工業高校ならではの強みにつながっていかなかった」

「ところがいよいよ廃校か、という段階に来て、地域からもう一度長井工業高校頑張れという声をいただいた。それで教員の間に、『開き直って、新しい学校をつくるつもりでゼロから改革構想を組み立ててみよう』という意思統一ができた。教員みんなの力で、誰からも認められるいい学校をつくってやろうというまとまりが生まれたんです」

教員集団の議論を受け、長井工業高校は1995年に「地域の発展と共に歩む県立長井工業高校」という資料集を作成。長井市の産業の実態、OBが地元でどのように活躍しているかについて分析調査を進めた。また地域の教育界、産業界、行政等と積極的に意見交換を進めた。いわば実証的に長井工業高校にどんな期待が寄せられているのかを明らかにしていったわけである。こうした検討作業の末、2000年に実現したのが機械システム科、電子システム科、環境システム科、福祉情報科の4学科体制への再編だ。

「化工科の募集を停止し、かわりに新設したのが環境システム科と福祉システム科です。環境システム科については、この地域に土木建築関係の知識を基礎から学ぶ場がほしいという地元企業などからの声が強かった。そこで時代の流れもあわせて考え、環境工学の要素も入れた総合的建築系学科として設立しました。また福祉情報科については、地域社会の高齢化にあわせ、福祉を学ぶ場が欲しいという要請に応えました。福祉情報科といっても、直接介護福祉士等を養成するカリキュラムはありません。工業高校として、たとえば福祉用具の設計など、あくまで工学的視点での学習が中心です。しかし実習的な授業の中では、実際にお年寄りと接する機会をなるべく多く確保しています。福祉への興味、関心が高まり、介護専門職に就いた卒業生もいます」（大貫教諭）福祉情報科の新設については、福祉、情報という切り口を設けることで、特に長井市内の女子中学生の進路先を確保するという狙いもあった。

「長井市内には、本校および普通科の長井高校の二校しか高校がありません。しかし以前の本校は圧倒的に男子生徒が多い学校でしたから、市全体として女子生徒の受け皿が極端に不足していました。自宅から近い高校に通いたいという女子は多いのに、その期待に応えられないのでは、地元の高校としての役割を果たせていないのではないかと。改革論議の中で、地域の皆さんからそんなご指摘をいただいたわけです。そこで女子にも進学しやすい工学系学科として福祉情報科をつくったという経緯もあります」（渡部教頭）狙い通り、福祉情報科は女子生徒が8-9割を占める学科となって今日に至っている。ほぼ1クラス分の女子が毎年入学してくることで、以前に比べ学校の雰囲気明るくやわらかくなり、生徒たちの学習態度や生活態度が大きく改善される効果も生まれた。

学校への誇りはどこから来るのか

また、機械科、電子科の機械システム科、電子システム科への改編も、単に名称変更にとどまらない、実質的な新学科設立に近いものだった。産業界の最前線では、機械工学と電子工学を融合したメカトロニクス、制御工学等の進化が著しい。機械システム科、電子システム科では、こうした領域に関する指

導も強化されている。現在、長井工業高校の一つの看板となっているロボットづくりを通じた教育は、その象徴といえる。

「廃校危機というアクシデントによって、校舎建て替えというハードの整備、学科再編というソフトの整備が同時にできた。結果的にこれが非常にラッキーでした。それまで教員たちは、現代的なものづくりのおもしろさを伝える授業をやりたくても、施設や設備の限界であきらめていた。ところが新しい校舎が建つことで、その夢が実現できる条件が生まれた。もちろん予算の限界がありますので、すべてが実現したわけではありません。しかし、旧態然とした工業高校ではない、新しい工業高校をつくるんだという学校全体の雰囲気の変化が、生徒たちにもいい影響を与えたのは確かだと思います」（渡部教頭）

2000年に4学科体制への再編、2002年に新校舎完成を実現した長井工業高校は、この前後から、目に見える教育成果を上げるようになる。1998年、国家資格である技能検定への合格者がはじめて誕生。翌年以降その数は倍々ゲームで増えていった。電算機部が自走型ロボット・マイクロマウスの東北大会で大学生チームらを押しよせ優勝、工作部の「1リットルで400キロ走行」の電動カートづくりもマスコミで大きな注目を集めた。こうして校内に活気が満ちると、中退者の数は激減した。低迷期には不人気だった運動部の入部希望者が増えていった、という話もあって、なるほどと思われた。学校の雰囲気の変化は、生徒に何をもたらしただろう。渡部教頭は「少しずつ自分たちの学校に誇りを持てるようになった、ということだと思う」という。ではその誇りはどこからやってくるものなのか。

「地域の学校を見る目が変わったということだと思います。長井の皆さんに、少しずつ、この学校が積み上げてきたものづくり教育の価値を認めていただいた。そして、いい面も悪い面も含め子どもたちの素顔を見ていただけるようになった。『きみは長井工業高校の生徒なのか。頑張れよ』という視線で見守っていただけるようになった。生徒は敏感ですから、それがよくわかるんだと思います。」（渡部教頭）

学校と地域の信頼関係。言葉にすればシンプルなこの要素こそ、長井工業高校が生まれ変わった最大要因だ。渡部教頭はそう分析する。地域で信頼される学校になると、入学者にも大きな変化が見られるようになった。かつてなら米沢等の近隣都市の高校に流出していたであろう長井市内の中学生が、少しずつ長井工業高校を進学先に選択するようになったのだ。つまりこういうことである。進学校に進むほどの受験学力はないけれど、地元で生きていく道を見つけないと願う長井の子どもと親がいたとする。高校進学にあたり、これまでなら偏差値という判断基準で「学区の中でどこでもいいから、とにかく入れる学校」を選ぶしかなかった。ところがよく聞くと、自分の暮らすまちの工業高校もおもしろらしい。

地元の期待に応えようとする学校

机に向かう勉強はあまり好きじゃないが、自分で課題を見つけてものづくりをするのは楽しそうだ。雰囲気も明るいと評判だし、中学の先生も「あそこは個人的にも親しくしている先生がいる。いい学校だよ」と言う。卒業生の多くは地域の企業に就職しており、頑張り次第で将来の進路にもつながりそうだ。だったら、わざわざ長時間の通学をしなくても、この学校に進めばいい。



そんなふうを考え、自分の意思で意欲を持って入学してくる地元の生徒が増えることで、長井工業高校はますます元気になる。入試倍率こそ、学区全体の受験生数と全高校の定員が拮抗しているため、さほど高くない。しかしかつてと比べ、入学時点で潜在能力、意欲の高い生徒が増えていると教員たちは口をそろえる。

長井工業高校体育文化後援会会長の吉田功さん（撮影・佐藤）

長井工業高校は、もともと「試験勉強の得意な生徒を集めて、教育成果があがったことを誇る」ような学校ではない。あくまで長井のまちに密着し、「ものづくり」という専門性の強みを生かして地元の教育への期待に応えようとする学校だ。

だからこそ、その再生物語は、学校の内部変革という筋立てだけで語るができない。長井工業高校を実質的に「変えた」エネルギーのみなもとは、長井という地域の中にこそある。渡部教頭も、この点についてはあっさりと同意し、印象的な言葉で語ってくれた。「**長井工業高校は、山形県立ではあるけれど、実際には長井市立高校のようなものなんですよ**」

では、地域の人びとは長井工業高校をどのように見ているのか。廃校騒動の際、先頭に立って存続運動を進めた地域リーダー、長井工業高校体育文化後援会会長の吉田功さんは、次のようなたとえ話を聞かせてくれた。

「逃げ出せない我々が守るしかないのだ」

「黒沢明の『七人の侍』という映画があるでしょう。あれは一見、流れ者の武士が百姓を救ったストーリーのように見える。でもよく物語を読み込むと、実はまったく逆の話なんです。百姓が実際にしたたかに武士を使って、自分たちの村を守る話なんです。私は、長井工業高校についてもまったく同じことが言えると思っています。今の長井工業高校は、校長も教頭も先生方も、よく頑張ってくれている。でも彼らはしょせん公務員です。いつかはあの学校からいなくなる。でも、われわれ長井のまちに暮らす人間はそうはいかない。ここから逃げ出すことができない。将来の長井を託す人材がもし育たなかったら、困るのはわれわれなんだ。だから私は、長井の子は学校で育てるんじゃなく、地域で育てると言っている。われわれが学校を使って、長井のまちを守らなければ、他に誰が守ってくれるんですか」

工業高校が地方小都市を再生する（3）～「長工生よ、地域を潤す源流となれ！」

「東京では実感が湧かないかもしれませんが、でもいま、地方の人間は本当に切迫した危機感を持っているんです。少子化が進み、産業構造が変わって、このままでは近い将来に地域社会が成り立たなくなる。私も企業経営者ですが、会社を守ろう、ここで踏ん張って生きていこうと思ったら、自分のところの利害だけを考えていたらダメ。地域ぐるみで、この先若い連中が生きていけるしくみをつくらないと」